

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第495号 平成25年2月18日

教師に求められる教養

「貴方には教養があるか」と聞かれたら何と答えますか？

月刊誌の日経ビジネス「Associate」が、自分の教養は十分か1000人のビジネスパーソンにアンケートしたところ、下表の通り自信をもって「教養がある」と思っている人は少ないようです（同誌2月号）。私も全く自信がありません。

十分身に付けていると思う	2.2%
まあまあ思う	26.7%
どちらともいえない	40.8%
余り思わない	25.2%
全く思わない	5.1%

そもそも一体、教養とは何なのでしょう。広辞苑では教養について、

- ・ 教え育てる事
- ・ 単なる学殖・多識とは異なり、一定の文化理想を体得し、それによって個人が身に付けた創造的な理解力や知識

と定義しています。この定義自体がいささか難解ですが、要は、教養があるといわれる為には、身に付けた様々な知識を創造的に活用できる事が必要で、単に豊富な知識を持っているという事だけではだめなようです。

この点について元一橋大学学長の阿部謹也氏は「教養には単に知識だけでなく、人格が含まれていなくてはならない。人格高潔とまでいなくても、少なくとも卑しくない人でなければならない。」と述べています（同氏著「教養とは何か」から）。人格が卑しくない人という事になると、教養はますます私から離れていく感じがしますが、日経ビジネスの編集者である坂巻正信氏は、「教養がある人」の要件として、「豊富な知識は要件その1で、『押しつけがましくなく、ほどよい頃合いで相手の心をつかんだりできる、知識をいい感じで出し入れできること』が要件その2だろうか」と述べています。

そこで問題となるのは、「教養がある人」の第1の要件である「豊富な知識」を如何に習得するかという事です。最もポピュラーな方法は読書という事になりますが、

この点について、上述の日経ビジネス「Associate」2月号では、1000人のビジネスパーソンに「今学ぶべき教養」について聞いています。

その結果は、1位「日本史全般」、2位「経済学」、3位「日本文化の知識」となっており、この結果にはなかなか興味深いものがあります。

アンケートの結果、学ぶべき教養の分野は100項目挙げられていますが、これを分類分けすると概ね上位の3分野に収斂されるようです。

現代のビジネスパーソンは、ビジネスに必要な実学的な知識を得るための勉強は当然の事として、それ以上に自国の歴史や文化をもっと知りたいという意識が強いようです。経済のグローバル化が進む中、自分の国の歴史や文化を語れないというのは恥かしい、という意識があるのではないかと思います。

自分の仕事に関わる専門的な勉強に止まらず、それ以上に、日本の歴史や文化など幅広い分野について知識を吸収しようとする姿勢は、学ぶべきです。

さて、毎年行われている教員採用試験の1次では、マークシート方式で教養検査と専門検査が行われています。

教養検査の内容は、「一般教養や教職教養について教員として必要な知識や理解を見る」とあり、一般教養は自然科学、社会科学及び人文科学について、教職教養は学校教育関係の法規及び教育原理、教育心理、道徳教育等についてマークシート方式で回答する事になっています。

つまり、教職教養はともかく一般教養においては、経済や社会、文化など幅広い知識が問われる事になりますが、この幅広い知識は、教師が常に求められている「人間力」の核をなすものだといえます。

上述の阿部氏は「教養があるという事は、『世間』の中で『世間』を変えていく位置に立ち、何らかの制度や権威によることなく、自らの生き方を通じて周囲の人に自然に働きかけていくことができる人のことをいう。これまでの教養は個人単位であり、個人が自己の完成を願うという形になっていた。しかし、『世間』の中では個人一人の完成はあり得ないのである。個人は学を修め、社会の中での自己の位置を知り、その上で『世間』の中で自分の役割をもたなければならない」と述べています（同氏著「教養と何か」から）が、教師の持っている役割や責任に着目し「世間」を学校や教育界に置き換えてみれば、教師が「教養」を身に着けるべく努力することの重要性が理解できると思います。

幅広い分野にわたる読書を通じて「教養」を身に着けるという教養主義は1970年代を以て終焉したといわれています。実際、竹内洋氏は、大学生の読書量を1965年と1995年で比較すると30年経過する間に読書量が8分の1以下に縮小したと指摘しています（同氏著「今日主義の没落」から）。2013年の今日においては、更に読書離れが進んでいると思われます。

かつて、旧制高校や旧帝国大学などの学歴エリート達の権威を象徴していた「教養主義」は驕慢だしグロテスクだとは思いますが、しかし、「教養」が社会との関わりの中で「いかに生きるか」という問いと深く関わっている以上、今後とも、「教養」を高める努力は怠るべきではありません。

勿論、「教養」は、普段から養う努力をしなければ直ぐに色あせてしまいます。ジャーナリストの池上彰さんが、著書「学び続ける」の中で、「教養とはなんだろう」という事を考えながら、結局、教養論ではなく勉強する事の意味や、学び続ける事の意味について考える事になった」と述べています。つまり、学び続ける意思と行動そのものが「教養」の原点といえるのではないのでしょうか。（塾頭：吉田 洋一）